

# うたとかたりの対人援助学

## 第16回 「屁ひり嫁」の3つの結末

鵜野 祐介

### オンライン授業の効用

コロナ禍の影響で、今年度秋学期（後期）の授業は対面方式、ライブ型オンライン方式、オンデマンド型オンライン方式の3つを併用している。オンデマンド型とは学生が自分の都合のいい時間にオンライン上で授業を受けられるというもので、じっくり考える時間がとれるためかコメントの分量が多い。

従来は授業時間の最後5分程でコメントを執筆してもらっていたが、オンデマンド型の場合、一応の字数制限は400字と設定しているものの、これはあくまでも基準にすぎないため、熱心な学生は制限をはるかに上回る分量で、しかも深い内容の感想や質問を寄せてくれる。このことはオンライン授業がもたらした効用の一つだと思う。

今回は最近おこなった授業（「文化の人間学」一文学部2回生以上対象で受講者は約170名）の「屁ひり嫁」に関する回（11月16日）を取り上げ、学生たちのコメントを紹介しながら、若い世代に昔話を伝承することの意味を考えてみたい。

### 昔話「屁ひり嫁」とは？

昔話「屁ひり嫁」は、『日本昔話通観 28 昔話タイプインデックス』では「笑い話—誇張」の話型群に分類されており、東北から九州・沖縄まで全国的に分布している。最初に、稲田浩二編『日本の昔話』下巻（ちくま学芸文庫 1999）に収載された群馬県中之条町の類話を紹介しておこう。

むかし、ある家で嫁さんもらったけど、しばらくすると青い顔になっちゃったんで、姑さんが、「どうしたんだ」って聞いたらね、「屁が出てえんだ」って言う。「そいじゃ、屁ひればいい」って言ったの。

そうしたら、「おれが屁ひりゃ、たいへんだから」って。「いいから屁ひれ」って言ったら、尻（けつ）まくって、ブーツでひったんだって。そうしたら、旦那さんもお婆さんも、前の大根畑へ吹っとなじやっただって。それで、「これほど屁ひるんじゃあ、はあうちに置くわけにはいかなえから、出ていってもらいてえ」って。ほしたら、出ていって。

そで、旦那さんが荷物背負って、お嫁さんを送っていたんだって。そしたら途中で、村のもんが柿とりにやってきて、いくらほたいも落ちんで困ってるんだって。そしたら嫁さんが、「ようし、おれが屁で落としてやる」って言うのと、「そんな、屁でなんて落としたり、この馬くれてやる」って。ほいで尻（けつ）まくって、ブーツとひいたら、柿がみんな、一つ残らず落ちちゃっただって。しょうがない、村のもんは約束の馬をくれたんだって。

そで、その馬引いていいたら、今度は米三俵積んだ荷車が、坂を上がれなくて困ってるんだって。また嫁さんが、「わけはねえ、おれが向うの家まで屁で送ってくれる」って言うのと、「そんなことはとつてもできねえ。もしできたら、この米みんなくれてやる」って言うから、それでまたうんとでかい屁をしたら、米三俵にその人まで、家のそばまで吹き飛んだんだって。

それで米三俵もらって馬に乗したら、旦那さんがすっかりたまげちゃって、「こんないい嫁御を返されねえ」

って、馬に米三俵つけて、家まで引き返してきたって。そしたら姑さんも大喜びして、それからその家は、嫁さんのおかげで大尽(だいじん)になったって。

(329-330頁、改行を一部改変)

### テツ子さんの語りと共振する聞き手たち

拙著『昔話の人間学 いのちとたましいの伝え方』(ナカニシヤ出版2015年)にも紹介したが、筆者はこの「屁ひり嫁」を2014年8月下旬、宮城県丸森町で行われた「第9回みやぎ民話の学校」の中で福島県飯舘村出身のテツ子さんから聞いた。会場の和室には百名ほどがいて、そのほとんどが中高年の女性だった。

テツ子さんは、東日本大震災による原発事故の後、避難生活を余儀なくされ、2014年8月当時は福島市の仮設住宅に暮らしておられた。80歳を過ぎて足も不自由になり、家の中に閉じこもりがちだった彼女は、当初この「民話の学校」に参加して昔語りをすることをためらっておられたというが、聞き手の女性たちの笑い声に後押しされるように、語り口もどんだんなめらかで力強くなり、次の爆笑へと誘った。「ここに来て、皆さんの前で民話を語れてよかった。元気をもらえた」と、テツ子さんは後で話されたという。

### 「屁ひり嫁」の語りの場

伝統的な昔話の語りの場面として多くの人がまず思い浮かべるのは、夕食後の、炭火からチロチロと炎が立ち上る囲炉裏端で、語り手はお爺さんやお婆さん、聞き手は幼い子どもたちといった情景ではなからうか。子どもの寝床で語る親や祖父母の姿が思い浮かぶという人もいるかもしれない。

ところが、『昔話の人間学』にも記したように、この「屁ひり嫁」の場合、このような家庭内での祖父母や親から幼な子への語り以外に、さらに2つの「語りの場」があった可能性が想定される。

2つ目の語りの場は、「座頭や屁ひり芸能をもって

巡国する輩」(田中文雅の説)や「世間師」と呼ばれる金物行商人たち(稲田浩二の説)が、村や町の外部からやってきて、その村や町の人たちを集めて面白おかしくこうした話を語ったというもので、それによって彼らは人びとの警戒心を解き、身銭を稼ごうとしたとされる。

また、3つ目の語りの場とは、「娘宿」や「子安講」などの、女性たちが寄り集まって食事をしたり、祝詞や念仏を唱えたり、年長者の話を聞いたりする場であり、そこで語り上手な年配の女性が好んで語ったのが、本話をはじめとする嫁と姑の葛藤譚であったと考えられる。前述した「みやぎ民話の学校」で筆者が目撃したのも、このような「女性による女性のための語りの場」であった気がする。テツ子さんの語りにおいても、大きな屁をひる娘の行く末を案じる母親の心情や、嫁に対する姑の態度が嫁の放屁の前後で豹変する様が生き生きと表現されており、聞き手の大半が女性であることが語り手に強く意識されていると感じられた。

### 復縁しない結末の類話

上に紹介した群馬県の類話の結末は、いったん離縁を言い渡された嫁が、実家に戻る途中に再び披露した「屁の力」によって富を獲得し、改心した夫や姑によって復縁できたというものであるが、別の形の結末を取る類話もある。

…じさまとばさまは、腰をさすりながらやっこさ起きてきて、「こんな嫁こは、いつときも家さおかれねえ。おん出してやる」と、おこったんだと。そこで嫁こは、すぐ荷物をまとめ、泣き泣き、馬こをみつけてきて、背中さ荷物を乗せたと。若だんなも来て、馬こ引っぱり、先になって歩いたと。嫁こは後から、ショボショボとついていったと。

二人が村ざかいの峠まで来たとき、やはり峠を越すらしい十人ばかりのさむらいさ出会ったと。道べりには大きい山なしの木があって、見あげると、なしがすずな

りなんだと。さむらいが「あれ、取るべ」と、てんでに石を拾ってはぶつけるけど、なかなか当たらねえ。嫁は、おかしくて「あははは」と、笑ってしまったと。さむらいはおこって、「無礼者(ぶれいもの)」と、刀に手をかけた。そしたら、殿さまが、「待て、なして(なぜ)わらうか。わけを話してみろ」と、ひざをのりだしてきた。

「これぐれえのなし落とすのは、おれのへー発でできる」「そんだら、落としてみろ」「おさむらいさん、ちょっと山のかげさ行ってけろ」

嫁は、男たちを追っばらうと、なしの木の下さ行って、大砲みてえに大きいおならを、ぶっとばしたと。太い大きななしの木は、ゆさゆさ、ゆっさ、ゆっさ、ゆれて、実も葉もみんな落ちてしまったと。さむらいがもどってみたら、木の下は地面も見えねえほどの、なしの山だったと。殿さまは、手をたたいて、よろこんで、「みごと、みごと、ほうびに、ほしいものをやるべ」といわれたから、嫁は思いきって、こういったと。

「おれ、家こ追い出されて行くところがねえから、家がほしい。ほかにほしいものはねえ」「そのぐれえは、造作(ぞうさ)もねえ」と、殿さまはいつて、嫁こが、さっき出てきた家の隣さ、りっぱな家を建ててやったと。おまけに、家のそばに、「へや」というて、へをふってもええ、小さい離れまで、こしれえてやったと。それがへやのはじまりだと。どんとはれ(岩手県、稲田和子他編『かもとりごんべえ』岩波少年文庫2000、24-29頁)。

#### 嫁ぎ先の隣に家を建ててもらったのは何故か

この話では、嫁は離縁されたまま、嫁ぎ先には戻らない。その代わり、殿様に頼んで、その家の隣に「へや」と呼ばれる放屁専用の小さな離れまで付いた立派な家を建ててもらう。このような結末で「めでたしめでたし」としていいのだろうか？ 現実問題として、隣の家に住む元夫や元姑と顔を合わさずに生活できるはずがなく、顔を見れば互いに気まずくなるはずで、わざわざすぐ隣に家を建ててもらった理由はなんだろう？

そんな疑問や感想を、授業の中で解説として付け

加え、学生たちの意見を求めたところ、ある女子学生から次のようなコメントが寄せられた。

並外れた特殊な能力を持つ女性が、結婚相手の家族から離縁されても、一人で生きている中で、その能力の価値を殿様 or 商人から認められるという、結婚をしてハッピーエンドで終わるようなおとぎ話とは対照的な話(離縁型の場合に限りますが)に興味深く思いました。当時は分かりませんが、現代の視点でこれらの話を見ると、ジェンダーバイアスに負けず、個人の能力を活かしながら労働を頑張る女性への応援にも個人的には捉えられました。

結婚を女性にとっての幸福の最終形とせず、個人の能力を活かして活躍しようとする女性への応援物語として、彼女はこの話を読み取っている。

そう考えると、わざわざ嫁ぎ先の隣に新しい生活の拠点を置いたのは、自分の活躍ぶりを元夫や元姑に見せつけ、彼らを見返してやるためだったとも解釈できるだろう。「あなたたちの言いなりになって一生を終えるのではなく、自分自身の力で生きてみせます」という意思表示とも言える。その背後には、姑がそう簡単に改心して嫁と仲良く暮らすなどということとはあり得ないはずだという、語り手の現実感が働いているのではあるまいか。

#### 頼りない夫へのツッコミ

また、やはり女子学生による以下のようなコメントもあった。

「屁ひり嫁」というお話を子どもの頃に読んだときは「へっこきよめき」という題名でした。幼い当時の頃は、姑という存在がいまいち、はっきりとしていませんでした。ただ嫁が屁をこいて面白い話だとか考えていなかったと思います。しかしこの年になると、「嫁と姑問題」はいやでも目に耳に入ってきます。これらの問題を把握したうえで改めて「屁ひり嫁」を読

むと、夫の存在が気になりました。「嫁姑問題」といえば夫の頼りなさが話によく出るからです。この昔話の夫も、姑に言われるがままに一度は嫁を追い出しますが、屁のおかげでものが手に入るというくだりで思い直して連れて帰ります。しかしその理由が、宝嫁だから、なので笑い話と割り切ればいいのですが少しツッコミたくってしまいました。

夫や父親の不在もしくは影の薄さ、存在感のなさは本話に限らず、日本の昔話の特徴の一つと言えるが、この学生が指摘するように、それは現実の夫婦関係や親子関係を反映するものかもしれない。

いずれにしても、学生たちが本話の主人公に自身を重ね合わせて、物語に込められた意味を読み取ろうとしており、それは先ほど述べた3つ目の語りの場、「女性たちの集いの場における語り」において体験されるものと合致すると思われる。そこでは、本話は単なる笑い話ではない。シビアな現実を「ワッハッハ」と笑い飛ばす話なのだ。

### 第3の結末—豹変しない姑—

こうして見てくると、並外れた放屁をした嫁に激怒して離縁を迫った姑が、嫁を呼び戻し復縁させた理由も「金」目当てであり、真の意味での改心ではなく、「復縁型」もやはりシビアな現実を踏まえた話であることがわかる。

それではこの「復縁型」と、婚家の隣に家を建てる「離縁型」のどちらがいいかと考えると、聞き手が若い女性たちであるとすれば「離縁型」の方がストレス発散できていいだろうし、一方、現役の姑や姑候補生が聞き手であれば、自身への戒めを促すという意味において「復縁型」の方が望ましいと言えるかもしれない。

ところで、このどちらでもない結末を取る類話を絵本の中に見つけた。富安陽子・文、長谷川義史・絵の『へっこきよめどん』（小学館2009）である。

この話では、嫁の屁の威力で向うの山まで飛ばさ

れたばばさまが、今度は引きっ屁（吸い込む屁）によって家まで引っ張り戻されるのを3回繰り返し、最初は大根、次にはタケノコ、最後はイノシシを抱えて家に戻ってくる。屁の収まった嫁が「おら、もう、このいえにはおられやせん」と言うと、ばばさまはにっこり笑って、「なあんの、おまえはたいしたよめっこだ。おかげでこんなにでっかいこんとたけのこと いのししまでとれたぞ。こんやは、とびきりおいしい いのししなべにしようや」と言う。

嫁の並外れた放屁に、この姑は態度を豹変させるどころか「たいしたよめっこだ」とほめたたえ、離縁もしない。この類話の出典は書かれていないので、もしかしたら再話者・富安陽子の創意によるのかもしれないが、伝承話の可能性ももちろんある。



絵本の最後には、「人に笑われるような欠点が、みごとに幸せを勝ち取る、へっこきよめどんの話は、私たちに、生きる勇気をあたえてくれるように思うのです」という松谷みよ子の解説があり、これが本話のテーマであるならば、姑の豹変は必要不可欠のモチーフとは言えず、幼い読者や聞き手にとってはむしろ有害であり、削除すべきなのかもしれない。

だが、このような「けなげな嫁」と「優しい姑」が仲良く暮らす結末の類話だけが生き残り、第1、第2の結末は忘れ去られてしまうとすれば、とても勿体ない気がする。せめて学生たちには、シビアな現実を踏まえた類話も合わせて紹介し、そこに込められた人びとの願いを一緒に考えていきたいものだ。